

『クリスマスの起源』(創世記 3章 8-15節) 2020.11.8.

<はじめに> 11月に入り、街中や店先にもクリスマスを見つけられる昨今です。毎年巡り来るクリスマスが盛大に祝われるのは、どうしてなのでしょう。

I エデンの園で

① 神に造られた人(1-2章)

神は天地万物を造り、最後にご自分のかたちに似せて人を造られ、エデンの園の管理を彼に任せました(1:26)。神ご自身と人が人格的交流を持つことを願われたからです。更に、人が一人であることは良くないと、ふさわしい助け手として女をも造られました(2:22)。

② 惑わしの声(3:1-6)

蛇の狡猾さを利用するサタンが背後に働いています。彼は「神は本当に言われたのか」(1)と疑問を投げ掛け、曖昧さと不安を引き出し(2,3)、権威ある者のような言葉で惑わし(4,5)、神よりも自分を信頼させて違反に至らせます(6)。欺く者の常套手段です。

③ 腰の覆い(7)

善悪の知識の木(2:17)から食べた二人は、目が開かれて自分たちが裸であることを知り、それを隠そうといちじくの葉で腰の覆いを作りました。事のよし悪しをすべて自分が基準となって判断するようになり、都合の悪いものは見えないように覆い隠すことを始めました。

II 断たれた交わり

① 主の御顔を避けて(8)

いつものように人と語り交わろうとされる神が園を歩き回られます。すべてをご存知の神である主の前にありのままに出られた二人が、御顔を避けて身を隠すようになります。直感的に自分自身が御前に悪であると自覚しての行動です。

② 罪のスパイラル(9-13)

「あなたはどこにいるのか」の神の呼び掛けに、人は隠れ場から答えます。交わりの習性は残っていました。そこで二人が神の禁制を破ったことも明らかになりますが、それぞれ責任転嫁を始めます。自分の罪の責任を負うことから逃げ出したいからです。

③ わたしは敵意を置く(14-15)

神がみことばで作られたこの世界を、サタンは言葉で惑わし壊しました。14節は蛇への宣告で、15節は蛇の狡猾さに乗じて神に反逆したサタンに対する宣戦布告です。サタンが神とこのことばに敵対したため、神はサタンとの間に敵意を永続的に置かれました。

III 救いと回復に向けての戦い

① 復讐の神(詩篇 18:47、94:1)

神である主は至高者であるが故に、ご自分に敵対する者に徹底的に復讐され、愛する者のために戦われます。彼により壊されたこの世界と交わりをそのまま放置せず、即刻対抗して建て直す戦いに打って出られます。神は罪を犯した人をなお愛されているからです。

② 世代を越えた戦い

この戦いは人類全体、子々孫々に及ぶものです。サタンの謀略への敵意として置かれた「彼」にサタンは襲い掛かり傷つけますが、「彼」はサタンに致命傷を与える勝利者です。これが、人を救う神が描かれたシナリオです。「彼」とは誰でしょうか。

③ 神は私たちの味方

神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。(ロマ 8:31-32)

<おわりに> 神のことばを疑い、逆らうことで、人は神に罪を犯しました。その人を罪から救うために、神はすぐに立ち上げられました。そのために神はクリスマスに御子を世に下されました。そして彼のことばを信じる者を救うと定められました。このギフトを受け取っていますか。(H.M.)